

ベールを脱いだ古医書の群像

眞柳誠著
黄帝医籍研究

林
克



A5判 642頁
汲古書院
[本体 6000円+税]

「黄帝医籍」という聞き慣れない典籍を本書は研究の対象とする。この「黄帝医籍」は著者・眞柳氏の造語で、『漢書』芸文志所掲の『黄帝内經』『黄帝外經』に由来する医書であるという。『黄帝内經』伝説によつて現代まで語り継がれてきた六書、すなわち『素問』『針經(靈枢)』『難經』『甲乙經』『太素』『明堂』の総称である。総称の理由は、これら六書は「内容のみならず、成書や伝承・普及の経緯が相互に関連して」おり、その歴史的関連性ゆえに「一括して考察しなければならない」からだとする。

この六書は著者が研究に取り組み始めた頃、既に研究の膨大な蓄積があつたが、同時に未解明・未解決の問題が山積し、「黄帝内經」伝説ぬきには歴史を叙述できない状況であった。ほどなく研究環境に大きな変化が出現した。多数の古籍

善本・出土文物が影印本や写真で利用可能となり、古籍のインターネット公開による世界的な図書館での原本調査や中国古典・工具書の電子文献化による字句検索が容易化したのである。このような状況下で既存の研究成果を踏まえて研究を進めれば、従来の議論に終止符を打てるとの予測ないし希望が著者を本書の執筆に導いたとのことである。

本書は序説と一章～六章から成り、序説で上述した「黄帝医籍」の概容と本書執筆の意図を述べ、一章から六章で「黄帝医籍」の各書を論じる。その内容には精粗の違いはあるが、手にしうる情報を最大限に利用し、推理力と想像力を駆使して黄帝書籍に関する大小の問題に次々と答えを出し、各書に関する詳細かつ壮大な文献学的論述を構築する。このような

本書の内容について紹介したいことは極めて多いが、スペースの関係もあり、評者が強い興味・关心を持った箇所を中心取り上げ、簡単に紹介したい。

『素問』章

版本系統の問題が本章の大半を占める。『素問』に関心を持つ者の多くは、北宋以降の『素問』のテキストは新校正本の比較的単純な展開であると理解してきた。これに対しても著者は詳細な調査・研究に基づき、北宋以降の新校正系の古版本は①熙寧二年（一〇六九）新校正本、②元豐間（一〇七八）孫氏校刊本、③宣和三年（一一二二）校刊本、④紹興二五年（一一五五）刊本の四系統に大別されるとする。纏めればこれだけのことであるが、それぞれの系統が更に枝分かれし、その全てにわたって詳細な分析を加えている。例えば、最善本とされ、よく知られた顧徳本について新知見を紹介し、またその信頼性を断言するが、現存本に関する疑念も率直に述べている。本書の記述は、『素問』の版本に関する、大方の理解のもつ大きな欠陥を補い、現段階で知りうる最高レベルの成果を示したと言えよう。著者の文献学的論述に圧倒される章である。なお、本章を読む際、第一節「序論」四「版本系統」所掲の「『素問』本篇の古版本系統図」のコピー

を傍らに置かることをお薦めしたい。

『針経』と『靈枢』章

古くは『九卷』『針経』と呼ばれたが、現在見ることでのきる『靈枢』はその末裔であると一般的に考えられている。著者は『九卷』（張仲景・王叔和）から『針経』九卷（『甲乙經』序）・『黃帝針経』（唐・永徽医疾令）を経て現『靈枢』までの足取りを丹念に考察する。中でも、興味を引かれたのは『黃帝針経』が『靈枢』に改名・改編された理由についてである。文献学的諸要素は勿論、南宋王朝の政治的動向が関わっていることを想定する。また現『靈枢』の歴史が無名氏本→未詳元版→紹興本→元祐本→高麗・新羅本→唐政府本までさかのぼることの解明も興味深かつた。いずれも妥当な推論と思われる。章末第六節「現『靈枢』の諸本」は現在使用する版本に関する考察であり、心に留め置くべき事柄が書かれている。『針経』九巻の旧態を追求するという史的意義があることなどである。

『難經』章

本書の中で最も記述の少ない章である。その成立について、原『素問』『靈樞』との関係および扁鵲との関係を考察する。

妥当な推論であろう。現在使われる『難經』について、初唐・

楊玄操の手に成る『難經集注』の系統を引くが、それ以前の

『難經』の編次は最近まで不明であつた。『難經集注』以前の『難經』の編次のみならず記述様式を暗示する資料について研究成果を紹介する記事は目を引くものである。

『甲乙經』章

その序文は漢書芸文志記載の『黃帝內經』と隋書經籍志以降に記載される『素問』『針經』『靈樞』との関係を明記する数少ない資料であり、中国伝統医学に関心を持つ者にとって『素問』『靈樞』が漢代医学を伝える文献であると推定する最も有力な根拠である。それを著者は明快な分析により根底から覆す。これまで他に依拠すべき資料が得られないために序文に頼つてきた評者としては、反論が全くないわけではないが、客観的に見れば仮説は妥当性が高い。印象に残つたのは、伝承における政治情勢との関係の指摘である。このことは本章だけのことではなく、本書全体の大きな特徴でもあり、文献考証に厚みを加える役割は大きい。他の研究者達が蓄積し

『太素』章

た注文の書式に関する成果に對し、著者が新たな解釈を示す部分があるが、文献学的視点で広く深く古典籍に向き合つてきた著者にして初めて提示できる答えであろう。

第二節「成書」では『太素』の選者・楊上善のものとされる墓誌に関連する部分が最も興味深かつた。当該墓誌に関する論考、張固也・張世磊「楊上善生平考拋新証」は、墓誌の記述と既存の資料に見える楊上善の記述の関連付けを行うが、その関連付けの妥当性について首肯できる所と不安に感じる所が併存する。主に後者について、著者は墓誌の記述との関連づけを補佐するが、その補佐する内容の妥当性についても両張氏の論述と同様に評者には二種類の所感が存在する。また、墓誌との関連で問題になるのが、諱と字の並記である。墓誌は楊上善の上を諱、善を字とし、両張氏は諱字並記が唐代には頻繁に行われたと主張する。これは頻度を別にすれば、唐代以外の史書にも見られる事なので、十分あり得ることである。ただ、奉勅撰書に諱・字を並記することは管窺の及ぶところではなく、判断を下しかねる。識者からのご指摘を待ちたい。第三節「伝承」の遣唐使関与の推定、第四節「現存本」の仁和寺本、その中国への環流などに関する詳

細な記述も印象に深く残った。

『明堂』章

原『明堂』の成書年代・旧態とその魏晋から隋までの伝承・変化・影響を提示し、唐代から平安時代に至る『明堂』関連文献の相互関係解明を基礎に、先人の『明堂』像推定作業の妥当性を確認した。とりわけ『明堂』の主要なテーマである孔穴と経脈に対する認識が前漢代から唐代まで変遷した過程の体系的論述は大きな成果と言える。ところで書名「明堂」に関する本章の仮説に触れておきたい。「明堂」の意味が、本書の論述中で評者の研究成果がある唯一のテーマであることによる（成果は中国と日本で講演したが、活字化未了）。本書は「明堂者鼻也」（『靈樞』）と天子執政の場所（『礼記』等）が「明堂」である事を結びつけ、人体における天子執政の場所を意味する「明堂」を書名としたとする。評者の見解では、気が通じ、気の状態を観測できる部位・場所が方技文献における「明堂」の基本概念であり、広義には本書が記述する天子執政に当たり日月五星を観測する場所に関連する。

の執筆動機・意図に述べられた諸条件を限無く利用し、情熱とエネルギーを傾注して生み出した仮説に満ちていていることである。その中には、素直に首肯できるものから、一つの考え方として受け取ることができるもの、時に疑問を感じるものまで、多種多様な仮説が存在するが、どれも未知・未解決の問題に全て答えを用意したいという著者の強い思いがにじみ出ている。一方で、多岐にわたって詳細に記述される文献学的文脈は辿るのに苦労する一面があるのも事実である。また、本書の詳細な註釈は「黃帝医籍」を扱う場合の基本文献集としても有用である。今後「黃帝医籍」を直接扱う場合は勿論、間接的に扱う場合にも必読の文献である。

（はやし・かつ 大東文化大学名誉教授）



本書は全篇にわたつて読み応えがあつたというのが全般的な印象である。その最大の理由は、本稿冒頭で要約した著者